

ジョン・W・ダワー著

『好戦的文化—パールハーバー | 広島 | 9-11 | イラク— (仮訳)』

奥田 純\*

A Book Review of  
*Cultures of War: Pearl Harbor / Hiroshima / 9-11 / Iraq*  
by John W. Dower,

Jun Okuda

第二次大戦とその後の米国による日本の占領とも対比して、9-11（テロ）とその後のイラク戦争に翻弄される米国を歴史家の観点から批判した歴史家ジョン・ダワーによる労作の書評。本書評では、非戦闘員の殺戮という行為が、正当性を認められた過去の戦争で如何に恒常化してきたかに焦点をあて、本書の題名の意味するところを明らかにしようとした。

**Key words:** 非戦闘員の殺傷、グラント・ゼロ、第二次大戦中の空襲、原爆投下

#### 本書との出会い

John W. Dowerの新著 *Cultures of War: Pearl Harbor / Hiroshima / 9-11 / Iraq* (注1) は圧倒的に重苦しい歴史書である。イラク戦争が未だ完全な終結を見ない現在では、時事問題書（英語で言う *Current Affairs*）に属す書物かもしれない。9-11 はアメリカを根底から揺るがした大事件であり、ニューヨークでの生活 18 年目に入っていた評者にとっても正に晴天の霹靂であった。9-11 直後の米国、ことにワールドトレードセンター 2 棟が崩落したニューヨークは沈鬱な気分になり、ありうるかもしれない第 2 のテロ攻撃の思いにさいなまれ、人々は皆恐怖心にかかられていた。マンハッタンのダウントウンに聳え立っていた巨大なビル 2 棟が崩れさったことは見慣れていた者にはいつまでも信じられない出来ごとであった。

正にアメリカ人にとってはパールハーバーの再来とも言える悪魔的行為であり、現代日本人を非難するものではなくても、パールハーバーが人々

の口をついて出てくるのも自然な状況であった。『敗北を抱きしめて—第二次大戦後の日本人—』(原題: *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II*) を著した日本通の著名な歴史家であるジョン・ダワーによる新著が、ニューヨークに滞在し 5 番街の書店で新刊本コーナーを漁っていた評者の目に飛び込んでくるや思わず手にしたものだ。(注2) 副題を表す固有名詞がそれと分かるように、表紙のカバーには白黒写真が配されている。9-11 は既に煙を上げるビル 1 棟の真横から飛行機 1 機が接近する写真で、イラクについては、サダム・フセインの倒れつつある大きな銅像の映った写真が用いられている。(注3)

歴史は風化するというのが、9-11 とこれに触発されブッシュ政権によって引き起こされたイラク戦争も現オバマ政権下で軍事占領が終息を迎えつつある今、一連の出来事の現実味が色あせてきた感も強い。第二次大戦前の大恐慌以来の金融破綻と不況に見舞われ、やっとその出口にたどりつこうとしつつも、高止まりした失業率を克服することが難しい中、経済がアメリカ人の現在の最大の関心事になっているとしても不思議ではない。

\* 四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科

そうした中で、忘れるべきではない歴史を膨大な文書を渉猟して描いたのが本書である。勿論きっかけは9-11の与えた衝撃であり、その奇襲攻撃という類似性から、パールハーバーが想起され、日米間の歴史の専門家でもある著者が、その視点から問題意識をもって何かを書かざるをえないと思ったのも当然であろう。実際、本書の第1部の最初の3章は、パールハーバーと9-11の比較にあてられている。<sup>(注4)</sup>ただ、この二つの出来ごとの間には60年の時間の経過があるにもかかわらず、アメリカの諜報活動の不全ぶりと情勢把握能力の欠如とは全く変わっていないと断じ、その語調は手厳しい。そして、筆を進め、明快にブッシュ政権のイラク戦争遂行を軍事的愚行と断罪している。戦前の日本の軍国主義体制下でのパールハーバー決行、その後の軍事的膨張戦略の愚と変わらないとし、ブッシュ時代の大統領制を帝政大統領制(Imperial Presidency)と言って憚らない強硬ぶりである。序文によれば、このイラク戦争への突入により、当初の著者の著作構想が大幅に変わり、2年もあれば脱稿予定の本著が8年近くもの時間を要するプロジェクトになったとのことである。<sup>(注5)</sup>フセイン独裁体制終焉後のイラク占領政策を不要(アメリカはフセイン独裁体制の解放者であるのだから占領政策など不要だとの主張)としてイラク戦争に乗り出したことの問題点を、第二次大戦後のアメリカによる日本の占領と比較して克明に分析している。<sup>(注6)</sup>

#### 忘れられた視点—第二次大戦中の空襲と原爆投下、グラント・ゼロの意味するもの

ただ、著者の独創的な視点が見られるのは、このイラク占領を扱った第3部の前に来る戦争についての諸考察を行っている第2部である。第二次大戦開始後、ドイツ、日本に対して行った英米空軍による空襲は、元々西洋的価値として重んじられていた、非戦闘員の殺傷を行わないという人道主義と明らかに反するものであった。この空襲に関する、当時の英米の政治・軍事関係者の言動の不一致を多くの文書に言及して論駁している。兵器の近代化による戦争の破壊力の増大(大量破壊

Mass Destruction)は、戦争の性格を変え、技術的な進歩は戦争を明らかにむごたらしいものとした。この最終到達点が原爆の開発であった。本書のこの開発に関する詳細な叙述と多くの注記は、当時の米国の戦争遂行の実際を迫体験させる迫力がある。

原爆の投下を決定したのは時の大統領であるトルーマンであるが、彼の『ボツダム日記』に原爆投下によって女、子どもを殺傷しようという気などなかったという趣旨の記載があると著者は引き合いに出し、原爆の威力を知っていたトルーマンが何故このようなことを言えたのか、そこに心理的な欺瞞と意図的な錯覚(deception and delusion)があったとしか説明のしようがないと指摘している。<sup>(注7)</sup>

9-11の惨状を伝えるのにグラント・ゼロ(Grant Zero)という言葉が9-11の直後からアメリカのメディアでいち早く使われた。この言葉の由来を著者は歴史家らしく、きちんと説明してくれる。1945年7月16日ニューメキシコ州の砂漠で行われた最初の原爆の爆破テストの爆心地のことを指すのに作られた言葉である。Grant Zeroと書かれた標識が立てられた現場の写真まで載せてある。そして、実際に最初に原爆が投下された広島はこのグラント・ゼロそのものであった。歴史の皮肉か、原爆を投下したアメリカが、自国が戦場のような様相を呈した9-11の現場を同じようにグラント・ゼロと呼んだ。何の罪もない民間人(非戦闘員)を殺戮したテロの非人道性を非難するのに使ったのだ。著者の視点からは、このグラント・ゼロという同じ言葉を使ったことから、逆にアメリカ人がグラント・ゼロの本来の意味を思い起こし、過去にアメリカが投下した原爆の意味合いを正しく理解し、非戦闘員の殺傷という点では同じであることに気づくチャンスが9-11の後ありえたと述べている。<sup>(注8)</sup>実際、このテロ行為を実行したアル・カイダはアメリカに『広島』の惨劇を思い知らせる(アメリカは必要もない原爆投下を広島、長崎に行い、また中東のイスラム圏でも罪のない人々を殺傷し続けてきたことをテロの正当化の理由にあげている)ことを、9-11の前から公然と喧伝していたとされる。

著者は、非戦闘員の殺戮をテロ行為としてくくり、その上で国家によるテロと非国家によるテロ

とに分けて見せる。狙いは、非戦闘員の殺戮という限りでは、非国家組織であるテロリスト・グループによるものであれ、国家によるものであれ、同じになりうるということを示すことにある。9-11の残虐性は誰の目にも明らかである。平時における突然の大量殺戮行為は正にテロであり、許しがたい蛮行である。ただ、非戦闘員を標的にして国全体の戦意と士気を喪失させることを主目的とした戦時における上記の空襲や原爆投下の結果はその残虐性という点で、また同等の非人道的行為になることも明らかである。<sup>(注9)</sup>

### 原爆投下に関する考察と著者の歴史観

しかし、原爆投下に関しては、それをすることで、何十万というアメリカ兵の犠牲を強いずに済んだ。従って、原爆の投下も必要悪として許容されるという原爆投下正当化論があることを著者は百も承知である。これに対して著者は真っ向から反論するものではない。原爆投下の決定は単純な理由に帰せられる訳ではない。ドイツの降伏後の第二次大戦末期におけるアメリカとソビエトとの極東での力関係から原爆投下を対ソビエト用の切り札として使おうとしていたこと、戦争下での新兵器開発が開発成功後は当然使用されるのを前提にしていたこと（広島はそれまで空襲の標的とはされてこなかったため、原爆投下による爆発力の確認に相応しいということで投下対象になった）、財政的にも巨費を投じて開発した兵器を使用しないままにすることの国内政治上の問題（税金の無駄遣いという批判を招く）等、種々の要因が原爆投下の意志決定に絡んだ事実を資料を駆使して見せてくれる。<sup>(注10)</sup>

次の文章は、上記の原爆投下に至る一連の非戦闘員の殺戮が常態となった理由を著者が考察しようとするに先立って書かれた1節である。

「時は語る」とか「歴史の判断」という言葉を使うとき、勿論それは言葉の遊びである。時が語ることなどないし、歴史も判断などしない。むしろ、歴史家も含め語り手は時間の経過とともに座標軸を獲得するのだ。つまり、感情を離れより客観的に、長期的な結末や影響力を知った

上で、そして当事者の意見や私文書さらに非公開であった文書へのアクセスのおかげで理解力を増して過去を見ることができるということだ。個人的な価値観が判断に影響を及ぼすかもしれない。論争も予測しうる。しかし、いずれにしても知識は厚みをまし、理解は変わる。<sup>(注11)</sup>

### 本書の題名の意味するところ

本書は *Cultures of War* と題されている。ブッシュ政権のイラク占領政策計画の欠如について言及する時、著者は、第二次大戦後の日本占領の際アメリカがのぞんだ姿勢、武力だけで占領がまっとうされるのではなく、国家建設（*Nation Building*）という目的をもつことの重要性にふれている。また、著者は非国家による9-11というテロ行為に対して、国家であるアメリカが過剰に反応して引き起こしたテロへの戦争（アフガニスタン、イラクの両戦争）の妥当性に大きな懐疑の目を向ける。国家と非国家の非対称的な関係での国家による武力一辺倒の対応策に大きな批判を行っている。赤裸々な武力行使のみで意志を押しつけようとする文化、非戦闘員をテロによって殺傷することで、自分たちの意見を通そうとする文化、これを著者は *culture of war* と呼び、建設的な変化により社会の変革をもたらそうとする文化を *culture of peace* と呼んでいる。歴史家として、前者が力を持つ世界が優勢であったことを認めつつ、過去の歴史から正しい教訓を引き出し、徐々にでも後者の文化が優勢となる場所に将来の希望をつなぎたいとして著者は本書を結んでいる。

(注)

1) John W. Dower, *Cultures of War: Pearl Harbor / Hiroshima / 9-11 / Iraq*, (New York: Norton, 2010)

2) 私事にわたるが、評者は9-11後もアメリカに居住、2006年3月に帰国した。この滞在は2010年9月の短期訪米の際のもの。

3) ジョン・ダワーの著作には歴史を視覚的にも認識できるよう、多くの写真やポスターが多用される。本書もハードカバーのジャケットに象徴的な写真を使っているだけでなく、本文中にも122枚の写真・イラストを

掲載し、このリストが巻頭に載っている。

- 4) 本書の構成は、序文、第1部 象徴としての『パールハーバー』— 選択した戦争と諜報の機能停止 — (1～7章)、第2部 1945年のグラント・ゼロと2001年のグラント・ゼロ— テロと大量破壊 — (8～12章)、第3部 戦争と占領— 戦争に勝って平和に負ける — (13～15章)、エピローグ 理由なき遠征と愚かな金融投資である。(邦訳は評者による試訳。尚、エピローグの原文は‘Fools’ Errands’ and ‘Fools’ Gold’ でいずれも徒労という意味の熟語として使われるが、内容的にそれ以上の意味が込められており、上記のように意識したもの。)
- 5) 原著で本文は序文を除いて452ページに及び、これに100ページ余りの注が付されている。日本語訳が出るまでにはかなりの時間がかかるだろう。何故8年近くもの完成時間を要したかは、本文を読み始め、注をひも解いてみると容易にわかる。この注で言及した書物、文書、資料のすべてにあたり、本書がそのうえで出来あがっているからである。単に参考文献をあげるだけではなく、該当のページを付し且つ寸評を加えている注が如何に多いかは驚くべきである。著者自身、注が長い点について触れているが、それは一つにはこの注も含めて本文の記述が完結するスタイルをとっていること。もう一つには、著者がそうした参考文献からいかに多くの示唆を得ているかを示しておきたいと思いつからであると述べている。
- 6) 前著『敗北を抱きしめて— 第二次大戦後の日本人 —』は正に日本の第二次大戦後の占領時代を扱った著書で著者の専門領域そのもの。
- 7) この日記からの引用は原文では次の通りである。

This weapon is to be used against Japan between now and August 10th. I have told the Sec. of War, Mr. Stimson, to use it so that military objectives and soldiers and sailors are the target and not women and children.  
(本書210ページより)

1945年7月25日の日記からの抜粋。著者によると、この日記はポツダム会議に関するさほど重要でない書類にまぎれ何十年も研究者の目に触れず埋もれていたもので、トルーマンの日々の思いをそのまま書きつけたもの。

- 8) Ground Zeroの標識の入った写真の掲載箇所のすぐ後に次の原文が来る。

In the wake of September 11, there was a brief moment in the United States when it seemed possible that Al Qaeda’s crime against humanity might help foster a popular consciousness and imagination concerning air war and terror bombing in general, past as well as present and future, that transcended patriotic parochialism and a reflexive thirst for retaliation in

near-kind. This did not happen. On the contrary, the rubric of Ground Zero was appropriated— expropriated, really—without serious discussion or thought about its origins at the dawn of the nuclear age.

(本書157ページより)

核時代の幕開けを記したGround Zeroの起源もよく考えず、この言葉を盗用したも同然と非難している。

- 9) 戦争に関して、正しい戦争か否かという戦争目的、どのような戦争行為が許容され、あるいは非難されるのかという二つの異なる問題を著者は区別して論じている。9-11の残虐性を非難するアメリカが、戦争行為としては同じように残虐な空襲や、原爆投下を過去行っていたことを引き合いに出している。核兵器こそ使用されなかったものの、第二次大戦後アメリカがかかわった朝鮮戦争、ベトナム戦争での非戦闘員(民間人)の死傷者の数は第二次大戦中のドイツや日本での非戦闘員の死傷者の数を上回る。敵の戦意、士気をくじくことが戦争に勝つために必要とされる心理戦争の必要性から、非戦闘員の殺傷は必要悪として半ば公然と承認されるに至っていたというのが著者の見解である。
- 10) 原爆投下を正当化する説明として最も説得力があるとみられるのが「もし原爆を投下していなければ、何十万というアメリカ兵の命が米軍の日本本土侵略で失われていたはずだ。原爆はこの犠牲を減らすことになった」という説であろう。1945年8月から10月にかけて、米軍には本格的な日本侵攻計画などなかった。何故、実験に成功したばかりの原爆を1ヶ月もしないうちに日本に投下しようとしたのか。実際の投下のタイミングからは説明がつきにくい。ソビエトのアジアでの国際政治上の脅威を米国が恐れていたのも大きな要因であったことが示される。1945年8月中旬までにはソビエトがアジアで軍事行動を開始することがアメリカには明白になっていた。その前にソビエトの動きをけん制し抑止するために使ったのだという説も紹介される。また、日本を無条件降伏に追い込んだのは、むしろスターリンの率いるソビエトが1945年8月に入って日ソ中立条約を破棄し、参戦した事実だとの見方も引き合いに出される。当時の日本政府はソビエトの参戦で日本が将来共産化され、天皇制が廃止されることを最も危惧した。原爆の投下がなくても日本は無条件降伏を行っていただろうという説である。著者は、この説については誰も分らないとしている。
- 11) 本書の原文は次の通りである。

When we roll out clichés like “time will tell” or “the judgment of history,” we are of course playing with language. Time does not speak, nor does history judge. Rather commentators including historians acquire perspective as time passes—regard the past with greater detachment, knowledge of long-term legacies, and

the fuller understanding that derives from accounts by participants and access to private papers and hitherto secret documents. Bias may color judgments, and controversy is predictable, but in any case knowledge becomes thickened and understanding altered.

(本文 221 ページより)

この節は、第 10 章『大量破壊の抗しがたい論理』(The Irresistible Logic of Mass Destruction) の冒頭「赤裸々な武力」(Brute Force) という小見出の後にすぐ続けて書かれている。

— 2011. 2. 1 受稿、2011. 2. 3 受理 —